The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『狭き門』のアリサの日記 : マドレーヌの日記から移された箇所について
Author(s)	小坂, 美樹
Citation	Gallia. 2007, 46, p. 17-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5543
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『狭き門』のアリサの日記
―― マドレーヌの日記から移された箇所について ――

小坂　美樹

はじめに

『狭き門』*La Porte étroite* (1909)[1] は、作者ジッドの人生を色濃く反映した作品である。作中でのジェロームとアリサの関係には、作者とその妻マドレーヌのいわば青春時代の伝記的要素が数多く見いだされる。実際に『狭き門』執筆時、創作の題材を探してジッドは、かつて自分が妻にあてて書いた手紙を読み返している[2]。特にジェロームの回想に続く「アリサの日記」は、マドレーヌがジッドとの結婚前につけていた日記に負うところ多く、マドレーヌの文章がしばしばそのまま用いられている。（マドレーヌは、若い頃の日記を夫が読むことを許していた。）

作家の妻の日記全体が明らかになる1977年[3] 以前より、彼女の日記とアリサの日記の比較検討が行われ、妻の日記からジッドが抜き出してヒロインの日記に用いた箇所についてはさまざまに指摘されてきた[4]。本論ではそうした先行研究をふまえたうえで、マドレーヌの日記からアリサの日記へと移る際にジッドが行った文学的操作を検証する。マドレーヌとアリサの日記に加えて、2005-6年に「ジッド友の会」の紀要に掲載された『狭き門』の草稿も分析の対象とし、本物の日記がどのような形で虚構の日記に用いられたかを明らかにしたい。

Ⅰ　マドレーヌの日記からアリサの日記へ移ったもの：精神的な一体感

ジッドよりおよそ三歳年上の従姉で1895年に彼の妻となるマドレーヌ・ロンドーは、ジッドとの結婚前に一年半ほどのあいだ日記をつけていた。彼女の日記帳

1）本稿では、『狭き門』のテクストはプレイアッド版を使用し、各引用後に題名の略号（*PE*）とページ数を示す。なお日本語訳は既訳を参考にしたうえでの拙訳である。André Gide, *La Porte étroite* in *Romans récits et soties, œuvres lyriques*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1958, pp.493-598.

2）ジッドの日記1906年３月29日の記述。ただし、ジッドはこの日の作業を無駄«en vain»であったと記している。André Gide, *Journal* I, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p.515.

3）マドレーヌの日記は、「ジッド友の会」の紀要に２号にわたり掲載された。«Le journal de Madeleine», in *Bulletin des Amis d'André Gide*（以下*BAAG*と略）, n° 35 (juillet 1977, pp.7-34) et n° 36 (octobre 1977, pp.7-23).マドレーヌの日記からの引用には、その末尾に*Journal de Madeleine*の略号（*JM*）と紀要の号数およびページ数を示す。

4）一例としてJean Schlumberger, *Madeleine et André Gide*, Gallimard, 1956. 特に第四章では、マドレーヌの日記から多くの文章が引用され、マドレーヌおよびジッドの行動が解釈される。本書はジッド夫妻を身近に知る者の証言として貴重な見解も多いが、マドレーヌを過度に美化している点には留意すべきであろう。

は二冊。一冊目には1891年1月12日から3月30日までの日付があり、冒頭には父親（1890年死去）の遺品の中にあったこの手帳に«les impressions quotidiennes» (*JM*, 35, p.7) を記したいとの一節がある。二冊目は一冊目の最後から数ヶ月を経た1891年7月18日に始まり、翌年7月3日で事実上終わるが、さらに三年後の1895年10月7日の日付でジッドとの結婚が短く書き加えられている。マドレーヌが日記を綴った1891年から92年（彼女は24–5歳、ジッドは21–2歳）は、ちょうどジッドが処女作『アンドレ・ワルテルの手記』によってマドレーヌに求婚し、マドレーヌはそれを拒絶するという二人にとって危機的な時期にあたる。このジッドの求婚とマドレーヌの拒絶は、まさに『狭き門』においてジェロームとアリサが経験するものである。

『狭き門』においてアリサは、ジェロームへの愛を捨て死を選ぶのに対し、マドレーヌは悩みながらもジッドと結婚する。したがって、二人（一方は虚構、他方は現実）の女性の根本的な相違は明らかではあるものの、マドレーヌの娘時代の日記にジッドへの複雑な思いが綴られているのもまた事実である。従弟の愛を受け入れるのか、彼への愛情はどのような性質のものなのかと自問を繰り返すマドレーヌの迷いは、アリサの苦悩へと受け継がれる。例えば、マドレーヌは日記で、ジッドとの精神的一体感を«Parfois, en t'écoutant parler, je me regarde penser» (*JM*, 36, p.12) のように表現する。この一文は、『狭き門』のアリサの日記において、ジェロームへの深い共感を書き記す部分で«Parfois en l'écoutant parler je crois me regarder penser» (*PE*, p.584) と、ほぼ形を変えずに使われる。また、こうした交感にもかかわらずマドレーヌは、ジッドへの愛情を«amitié un peu protégeante de sœur aînée» (*JM*, 35, p.9) と考える。そしてアリサも、日記ではないもののジェロームへの手紙において彼を繰り返し«mon frère» (*PE*, p.512 et passim) と呼ぶ。二つの日記の類似点についてはすでに研究者により列挙されているので、ここでは以上の例を挙げるにとどめるが、アリサの日記には他にもマドレーヌの日記からの引用が明白な箇所は多い。また聖書や文学作品よりマドレーヌが写した一節が、そのままアリサのものとして用いられる場合もある。二つの日記を比較すれば、『狭き門』の作者は、妻の文章をかなり直接的に物語に引用し、アリサが綴る虚構の日記のために、マドレーヌによる現実の日記を大いに活用したことが認められるのである。

しかし、写したという事実以上に重要なのは、選びとったマドレーヌの文章を、ジッドがアリサの日記においていかに用いたかであろう。『狭き門』は一つのまとまった物語であり、アリサの日記もその筋に従わねばならない。ゆえにマドレーヌの言葉が、アリサの日記にたとえ形を変えずに現れたとしても、それは単純な移動ではありえない。現実の日記から虚構の日記へテクストを移すには、物語に適合させるための並べ替えや修正が必要である。そして何より、もとの日記の文章をそれが書かれたコンテクストから引きはがし、物語のコンテクストへと埋め込む操作がなされねばならない。『狭き門』の場合も、マドレーヌの日記の一文は、アリサの日記へと、すなわち現実から虚構のコンテクストへと移されることでまったく異なった

響きを発し、マドレーヌとは違う虚構世界の人物アリサができあがるのである[5)]。

同じ文が、二つの日記において異なった意味を持つことを具体的に検証するにあたって、我々が次に注目するのは、『狭き門』の草稿である[6)]。「ジッド友の会」の紀要に示された草稿には、ジッドがマドレーヌの日記からいくつかの文ならびに節を転写した紙片三枚が含まれる。この紙片により、ジッドがマドレーヌの日記のどの部分を写し、アリサの日記へ引用したのか、あるいはしなかったのかといった創作過程の一端が分かるのである。

ジッドが妻の日記からヒロインのために抜きだしたのは十数箇所。マドレーヌの文章をそのまま写したものや、一節の内容をジッドの言葉で要約したもの、引用の間にジッドのアイデアが簡単に挿入されているものもある。当時のジッドの計画の中心が「女性登場人物の心理描写[7)]」である点を考えれば、選ばれたマドレーヌの文章の大半が『狭き門』の内容に従うように、ジッドとの関係に悩む部分であるのは言うまでもない。妻の日記から書き写された文章の数は決して多くはないので、この草稿を経由せずに、マドレーヌの日記からアリサの日記へと移ったものもあるが、ここではまずマドレーヌの日記から草稿メモを経由し、アリサの日記へと移っていった一節を取りあげて分析したい。

先に、マドレーヌとジッド／アリサとジェロームの精神的一体感を表す一文を引いたが、これはマドレーヌの日記から草稿に書き留められ、さらにアリサの日記に用いられたものである。ただし、マドレーヌの日記には、«Parfois, en t'écoutant parler, je me regarde penser»の後に次のような一節が続く。

> Et cependant tant de silences entre nous, sur tout ce qui nous intéresse le plus en tout sujet, produisent peu à peu leur effet, et nous éloignent lentement l'un de l'autre. Nous entendons encore les paroles, nous voyons encore le visage, peu à peu le son seul de la voix nous parviendra, les traits disparaîtront devant l'ensemble, jusqu'à ce que, la brume et le silence grandissant entre nous, tout s'efface "dans le passé mort". (*JM*, 36, p.13.)

上記の一節が伝えるのは、マドレーヌの日記にあったジッドへの深い共感よりむしろ、それが失われ、二人が次第に離れつつあるという認識であり、そしてこれからの二人の間には沈黙が広がるであろうという悲しい予見である。ジッドはこ

5）ジッドはマドレーヌとアリサの違いをしばしば強調している。例えばジッドは『今や彼女は汝のなかにあり』において次のように言う。«Mais quelle erreur commettrait celui qui croirait que j'ai tracé son[de Madeleine] portrait dans l'Alissa de ma *Porte étroite* ! Il n'y eut jamais rien de forcé ni d'excessif dans sa vertu.» (André Gide, *Et nunc manet in te* in *Souvenirs et voyages*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 2001, p.963.)

6）«Les brouillons de *La Porte étroite*», in *BAAG*, n° 148 (octobre 2005, pp.471-510) et n° 149 (janvier 2006, pp.53-92). 紀要に掲載された草稿は、現在Pierre Masson教授により準備中の新プレイアッド版には量の関係上収録されないと予測されているものである。

7）Masson教授は、この紙片について次のように解説する。«Ebauche de plan, centré sur la psychologie du personnage féminin, nourrie de références au carnet de Madeleine de 1891-92.» (*BAAG*, n°149, pp.91-92.)

の一節を草稿には転写しながらも、アリサの日記には、ジェロームとの一体感を表す文のみを選び、続く一体感の喪失についての一節は採用しなかった。そのうえアリサの日記では、以下のように、ジェロームとの一体感がより強調されている。

> Parfois en l'écoutant parler je crois me regarder penser. Il m'explique et me découvre à moi-même. Existerais-je sans lui ? Je ne suis qu'avec lui ... (*PE*, p.584.)

このように、マドレーヌの文章は、もとのコンテクストから切り離され、アリサの日記において対照的な意味を付与される。マドレーヌの日記からアリサの日記への移動は、単なるコピーではなく、まとまった一節から一文のみを抜きだし、それがまったく異なる意味を担うよう物語に埋め込むという慎重な移植作業なのである。マドレーヌでは失われゆくものとして提示された精神的一体感を、ジッドはアリサにおいては逆に際立たせる。ジェロームの存在が自らの存在のよりどころとなるほどの完全な一体感を抱いているからこそ、アリサにとって彼と別れるという選択が苦痛に満ちたものであることを、こうして浮き彫りにするのである。

Ⅱ　マドレーヌの日記からアリサの日記へ移らなかったもの：父親の役割

次にマドレーヌの日記より草稿に転写されながらも、アリサの日記には用いられなかった箇所について考えてみたい。草稿には、ジッドがマドレーヌの日記から写した文のなかで最も短く、かつ他の引用に比べて物語の展開とは一見無関係と思われる箇所がある。

> La mort du père
> «pas tant de bruit mes enfants»
> revoir le carnet [8)]

«pas tant de bruit ...»は、マドレーヌの父親が彼女を含む娘たちにつぶやいた言葉で、その前後はジッドによる覚え書きである[9)]。紀要によれば、「父の死」というジッドのメモ書き部分の“父”の前に“母”の語が線で消されているらしい。ジッドのこうした「書き間違い」も興味深いが、ここでは、マドレーヌの日記における彼女の父親と、『狭き門』に描かれたアリサの父親の違いについて分析をこころみる。

マドレーヌの父エミール・ロンドーは、ジッドにとっては母方の伯父にあたり、『狭き門』ではアリサの父親（すなわちジェロームの叔父[10)]）のモデルとなっている。父親の短い一言をマドレーヌが書き留めるのは1891年２月１日。彼女はその日、一年前の出来事を回想する。以前から体調のすぐれなかったエミール・ロンドーは、マドレーヌら子供たちと出かけたものの食事もままならず、帰路には疲

8）«Les brouillons de *La Porte étroite*», in *BAAG*, n° 148, p.508.
9）マドレーヌの日記では«Mes enfants, pas tant de bruit» (*JM*, 35, p.14) となっている。
10）ここでは、既訳に従い「叔父」としたが、原文ではアリサの父親はジェロームの«oncle»とあるのみで、伯父／叔父のどちらにあたるかは示されていない。

れ果て、娘たちの笑い声に耐えられなかったのだ。その後の病状悪化は著しく、この言葉を発した一ヶ月後に彼は亡くなっている。この伯父についてジッドは、自伝『一粒の麦もし死なずば』において、不貞をはたらく妻に苦しめられ「老け込んだ」と書き、彼の顔を「額の痛ましげな皺と、不安げなそして時には疲れきったまなざし[11]」と描きだす。伯母の出奔とそれにともなう伯父の心痛は、『狭き門』でもアリサの両親において忠実に再現される。

娘マドレーヌからも、また甥のジッドからも、憔悴した姿で描かれるエミール・ロンドーのイメージは、『狭き門』のエミール・ビュコランに反映されている。『狭き門』におけるアリサの父親も、そのモデル同様、常に「悲しげ」(*PE*, p.548)で「疲れている」(*PE*, p.533)。アリサに対しても、父娘の立場は逆転し、彼はしばしば「狼狽の色を隠さず、姉娘に支えと助言と励ましを求める」(*PE*, pp.507-508)のである。夫を裏切り家庭を捨てるアリサの母親が細かい描写とともによくも悪くも強い印象を残すのに対して、その夫の影は相当に薄いと言わざるをえない。

アリサの日記にも、「パパはまた加減がよくない」(*PE*, p.585)と、父親の体調を気遣う箇所が一つある。しかし、この部分に先に引用したマドレーヌの父親の言葉«pas tant de bruit...»は、実は用いられていない。その代わりにジッドは、マドレーヌが同じ日に書いた別の文をアリサの日記に組み込んでいる。マドレーヌは、医者が指示した厳しい食事療法について、父親に許されるのは«Rien que du lait» (*JM*, 35, p.15) と嘆く。この部分がアリサの日記でもほぼ同じように、病状すぐれぬ父親について«il a dû se remettre au lait» (*PE*, p.585) となっている。このように、マドレーヌの日記からアリサの日記へ移ったのは、ジッドが草稿に書き留めた「静かにしておくれ、子供たち」の一文ではなく、その少し後の「牛乳療法」の箇所であった。確かに、いずれも父親の病状悪化を示すものではある。しかし、マドレーヌの父親の言葉は、たとえ口調は穏やか«d'une voix très douce» (*JM*, 35, p.14) であっても、子供たちへの命令である限り、父親らしさを喚起しうる。そこでジッドは、牛乳しかのどを通らず娘に庇護される父親像を示すことで、先に挙げた『狭き門』での父娘関係の逆転を別の角度から裏付けるのである。『狭き門』においてアリサの父親は徹底して弱々しく描かれる。しかも、アリサの日記で父親が言及されるのは、この日のみである。しかし、こうした登場方法にもかかわらず、アリサの父親は物語において重要な役割を担っていることを忘れてはならない。

再びマドレーヌとアリサの日記の比較に戻ろう。マドレーヌの日記から多くの文章がアリサのものとして用いられているため、二つの日記の類似を否定することはできない。しかしながら、同時に我々が気づくのは、マドレーヌの日記とアリサの日記の調子の違いや内容の相違である[12]。アリサの日記が一貫した筋をも

11) André Gide, *Si le grain ne meurt* in *Souvenirs et voyages*, *op.cit.*, p.160.拙訳。

12) 二つの日記の調子の違いについては以下の二論文を参照のこと。Michel Lioure, «Le *Journal d'Alissa* dans *La Porte étroite*», in *Information littéraire*, 16, 1964, pp.39-45. Anny Wynchank, «*La Porte étroite* et Le *Journal de Madeleine*», in *BAAG*, n° 42, avril 1979, pp.41-49. Lioureは、マドレーヌの日記にはなくアリサの日記には見られるものとして、«la résonance mystique» (p.43) を挙げ、Wynchankも同様に、それが«l'exaltation mystique» (p.42) であると指摘する。

つのに対し、マドレーヌの日々の記録は断片の寄せ集めに過ぎない。またアリサの日記がジェロームとの関係を特化して描く一方、マドレーヌの日記にはさまざまな内容が書き留められる。こうしたテクストの性質上の差異は当然としても、そのうえでマドレーヌの日記を何よりも特徴づけるのは、一年ほど前に他界した父親についての記述が非常に多く、かつその調子がきわめて感情的なことである。

マドレーヌが父親について記す箇所は、ジッドに関する記述の量に比べて決して少なくはない。また、マドレーヌの日記で、二人称で呼びかけられるのが、神、ジッド（アンドレ）そして父親であることからも、マドレーヌの日記における父親の重要性は、ジッド以上ではないとしても、以下でもないと言える。もちろん、マドレーヌが日記として用いている手帳そのものが父親の遺品であり、その冒頭で彼女は父親について言及し、«je veux écrire pour lui, près de lui» (*JM*, 35, p.7) と書くのだから、彼女が日記をつけながら常に父親に思いをはせるのは自然であろうし、また母親の家出という家庭の不幸が娘と父親を一層強く結びつけていたのも事実である。ただ、マドレーヌの記述は単に父親の思い出にとどまらない。「牛乳療法」について記した日の最後にマドレーヌは、«Papa, cher Papa, te revoir, te revoir, être avec toi et pour toujours ...» (*JM*, 35, p.15) と、悲痛な一文を記す。彼女は日記に父親を失った悲しみを打ち明けるとともに、亡くなった父親に繰り返し呼びかけ、再び会いたいと願う。次の例も同じ内容ながらその調子は一層切迫しており、父親との再会は、すなわち自分の死を意味することすら示している。

> O Père, où es-tu ? Quand, quand te reverrons-nous ? Nous vois-tu, nous aimes-tu toujours ? Suis-je toujours ta fille, ta fille aînée ? O Père, reviens, ou que j'aille vers toi ! (*JM*, 35, p.30.)

マドレーヌがジッドについて綴った文が、さまざまな形で物語の素材として用いられたのに対し、マドレーヌが抱く父親への強い思いは、少なくとも文字のうえでは、アリサの日記に受け継がれていない。マドレーヌの日記に頻発した父親への呼びかけも、アリサの日記には、（神やジェロームへの呼びかけは繰り返されているにも関らず）まったく見られない。それどころか、アリサの日記に父親が登場するのは、先に挙げた一箇所のみである。

しかしその父親がきっかけとなり、ジェロームの回想からは分からなかったアリサの一面が明らかになる。父親の不調について書いた同じ日、アリサは日記に前の晩の出来事を記す。アリサが一人で（めったにないことながら）長椅子に横たわりぼんやりと自分の足先を眺めていると、父親が入ってきて、唐突に母親との思い出を話し始める。なぜ急に母親について語るのか理解できずに尋ねるアリサに、父親は、「横たわるお前を見た時、一瞬お前のお母さんかと思ったから」（*PE*, p.585）と答える。アリサの日記はさらに続く。

> [...] ce même soir... Jérôme lisait par-dessus mon épaule, debout, appuyé contre

> mon fauteuil, penché sur moi. Je ne pouvais le voir mais sentais son haleine et comme la chaleur et le frémissement de son corps. Je feignais de continuer ma lecture, mais je ne comprenais plus ; je ne distinguais même plus les lignes ; un trouble si étrange s'était emparé de moi que j'ai dû me lever de ma chaise, en hâte, tandis que je le pouvais encore. (*PE*, p.585.)

息づかいが感じられるほど近いジェロームの存在、ひいては彼の身体そのものに対して心乱れ慌てるアリサの様子は、物語で唯一、彼女の官能性とまでは言えぬとしても、若い娘らしい体温を感じさせる箇所である。アリサはさらにその少し後で«Pauvre Jérôme ! Si pourtant il savait que parfois il n'aurait qu'un geste à faire, et que ce geste parfois je l'attends ...» (*PE*, p.586) と切ない一言を書き加える。

マドレーヌの日記にも読書についての記述は多く、ジッドがそばにおらず一人で本を読む寂しさを嘆く箇所もある。けれどもマドレーヌの日記には、アリサの日記のような胸の高まりを示す直接の記述は見あたらない。

語り手ジェロームによって描かれるアリサは、ひたすら徳をめざし、天上への愛に生きる。それゆえに彼女が従弟のほんの少しの動作«un geste»を待つというこの一文は、読者の注意をひかずにはおかない。こうした記述は理想的な女性像を体現するアリサへの汚点«tache[13]»であると作者を批判する論もあるが、やはりここはアリサの複雑な心のありようの表出と解釈するのが妥当ではないか。なぜならこの部分は、物語の他の部分と響きあうよう巧みに組み立てられているからである。

横たわりぼんやりと足先を眺めるアリサは、物語冒頭で想起されたアリサの母親のものうげに横たわる姿とまず形のうえでみごとな対称をなす。母親と娘の接近は、横たわる姿勢のみではない。さらにジッドは、女性の美しさを表す形容詞«belle»と«jolie»を明確に使い分ける。アリサの母親や妹の表面的な美しさには«belle»が、一方アリサの内面からにじみでる優美さには«jolie»が選択される。ところがジェロームとの出来事を綴るこの箇所で、いままで一貫して使い分けられていた形容詞が初めて反転する。アリサは次のように日記に記す。«Lorsque j'étais enfant, c'est à cause de lui[Jérôme] déjà que je souhaitais d'être belle.» (*PE*, p.586.) ジッドは、母親に用いてきたbelleという形容詞を、アリサ自身の言葉として彼女を形容することにより、単語のレベルにおいても娘と（地上の愛に生きた）母親を近づけ、アリサが完全に天使的な存在ではないことを示す。ここはまた同時に、アリサの徳のみを受け入れ、彼女の内面に気づかなかったジェロームの精神的盲目が暴かれる箇所でもある。アリサの人間的な一面を、間接的でありながらも効果的に照らし出すことで、彼女にとってジェロームから遠ざかることは、決して自然な選択ではなく、苦痛に満ちたものであったことが提示されるのである。物語全体としては周辺人物の一人でしかなく、アリサの日記においても数行

13）Marie Ascarza-Wégimont, *Regard et Parole dans* La Porte étroite *d'André Gide*, Lyon : Centres d'Etudes Gidiennes, 1994, p.136.

にのみ登場する彼女の父親には、アリサの別の一面を導きだす重要な役割が与えられていたのである。

マドレーヌは日記の中で、もはや現実には失われた父娘の絆を彼岸にまで求めていた。マドレーヌの父親への強い思いや切実な呼びかけは、文字通りにはアリサの日記には受け継がれなかった。しかし、亡くなった父親という不在の対象を求めるマドレーヌの日記は、不可能を希求するという一点を軸に、手をのばせば触れることのできるジェロームからひたすら遠ざかろうとするアリサの日記へと転換される。マドレーヌの日記においての父親の重要性は、まったく別の虚構となってアリサの日記に現れるのである。

おわりに

マドレーヌの日記から草稿を経由しアリサの日記へと移された文章と、草稿には転写されながらも物語へは移らなかった箇所を検討し、アリサの日記が作家の妻の私的な記録の単なる並べ替えではないことを確認した。たとえマドレーヌの文章が形を変えずにアリサの日記に用いられたとしても、マドレーヌの言葉は、アリサの日記という物語のコンテクストに埋め込まれることで、まったく異なる意味が付与される。自分で考えた文章ではないとしても、どこを選びそれをどのように作品に用いるかがジッドの作家としての技量と言えよう。本論で示した例では、アリサのジェロームへの思いの深さ、そして彼への人間的な愛情の存在を強調し、いずれも自己犠牲を前に引き裂かれるアリサの苦悩をくっきりと浮かびあがらせる。こうしてアリサの実りのない生き方と悲劇的な最期を示した『狭き門』は、ジッドの言うように«une certaine tendance mystique[14]»への批判の書となるのである。

（大阪大学非常勤講師）

14）*Œuvres complètes d'André Gide,* t. XIII, nrf, 1937, p.439.